


琉球大学農学部 上原研究園 堀の体験会 ～森林浴～


今回、琉球大学上原研究園にて「森の体験会」の案内があり、コロナ禍ではありましたが園児の人数も少人数だったこと、屋外での活動ということで蜜を避けられることもあり参加させていただきました。その様子をどうぞ。



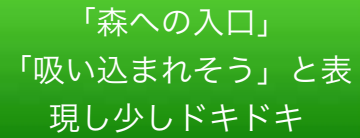
上原研究園入口
先生も迎えてくれ
少し緊張気味 (笑)



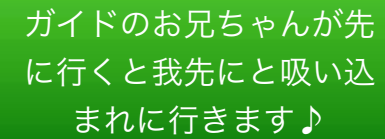
中へ入ると




緊張よりも興味が
き立てられ
思う存分楽しめます。



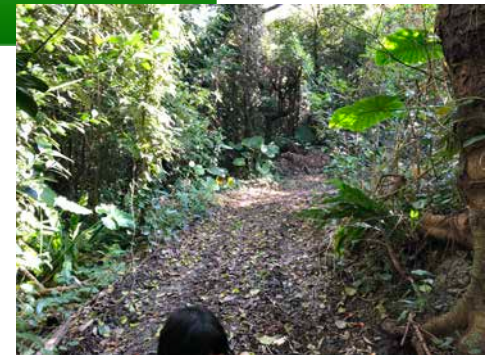
「森への入口」
「吸い込まれそう」と表
現し少しドキドキ



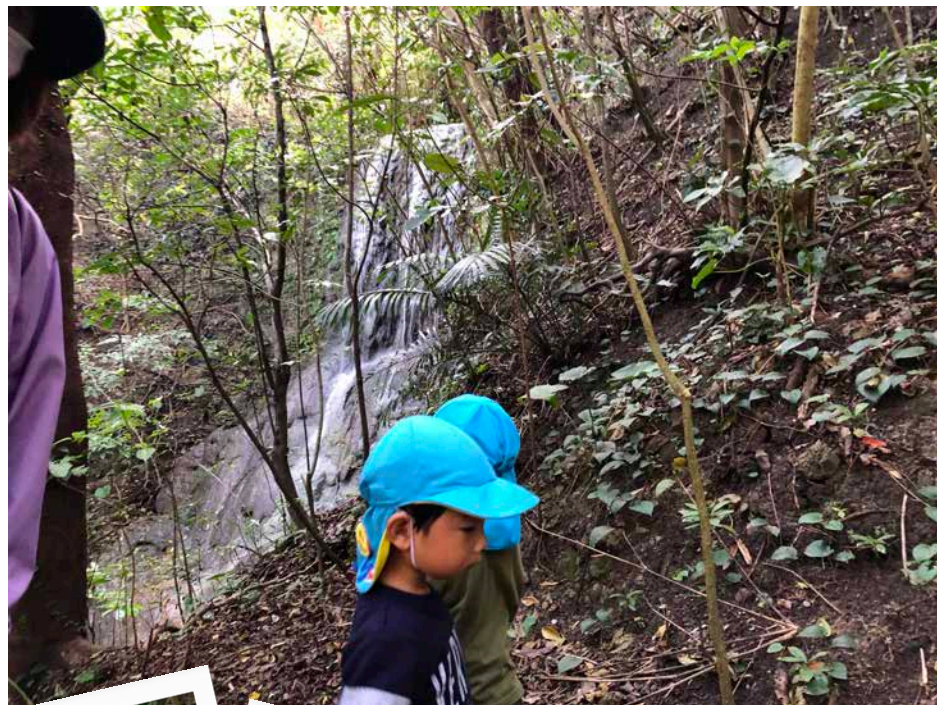
ガイドのお兄ちゃんが先
に行くと我先にと吸い込
まれに行きます♪



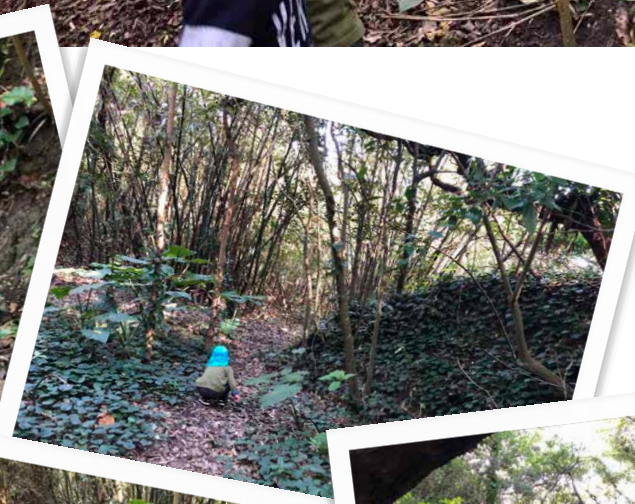
どーんどん先へ駆けてい
きます。



森をどんどん進むと
そこには滝!!!



滝を少しみてまた駆け出します♪



次はにんじん畑！！



島ニンジン収穫させてもらいその後はどろんこまみれ。どろんこの感触を楽しみました♪



今回、隣接する上原研究園へ招かれ、探索する中で、自然環境の偉大さ感じさせられました。変化に富み興味にそそられる。風の音、川の音、木の葉の音、枯れ葉、枯れ木、土、植物。ここではこれら自然物が子ども自らとが玩具を生み出し楽しみを生み出していく。非日常という環境がそうさせるのかもしれないが常に変化を感じさせてくれる自然環境のすごさを感じさせてくれました。

このような機会をくださった琉球大学農学部の先生、学生の皆さん、技術職員の方々に感謝申し上げます。

ランゲフェルトさんの文。
よければ一読そうぞ♪



「意味探索の歷程」としての子ども発達

階段で以前よりも高い段から飛び降りることができるようになると、子どもは自分を誇らしく感じ、「先生見て！」と何度も飛び降りる姿を幼児教育者・保育者（以下「保育者」と略す）に見せつけてくることがある。この時、以前よりも高い所からの眺めや、飛び降りる感覚は子どもにとっては今までとは「別物」である。初めて自転車を買ってもらった子どもが今まで一人で行ったことがなかった見知らぬ通りを走り、行動範囲を広げていく時も同様であろう。子どもたちはどこかに不安を抱えながらも果敢に新しい世界に挑戦し、自分の世界を広げるとともに、そのような冒険を成し遂げた自分を以前とは違う、より「大きくなった人」と感じる。それは「新しい世界の発見= 世界の意味付け= 新しい世界を形成」であるとともに、その様なより広い、より新しい世界に存在することができるようになった、「以前よりも偉大な自己の発見=自己の意味付け=自己の形成」でもある。このように「何かを意味付ける」、すなわち「意味付与」を特徴とする人間においては世界形成と自己形成が表裏一体となって生じ、相即している。ランゲフェルトは子どもの発達を「意味探索の歷程」と呼んでいるが、このように、子どもが「育つ」とは、大人の導きを手がかりとしながらも自ら探検や冒険を繰り返して、この合わせ鏡のような世界形成と自己形成を拡大していくことに他ならない。したがって、個々の子どもの世界形成—自己形成はどれ一つとして同じものではなく、個性的で創造的な過程なのである。